

『発想法－創造性開発のために』

川喜田二郎著／中公新書

もう丸々30年も昔の話ですが、中学生になった私は千葉県の自宅から都内の学校へ電車通学を始めました。片道90分です。往路は朝のラッシュの真最中で身動きが全くとれないばかりか、ヤワな体が潰されてしまわないようにひたすら耐えるばかりです。窓ガラスが割れたりもしました。しかし、部活のない日の授業は午後3時前に終わり、復路90分をずっと座って行くことができました。車内の友といえ、最近では携帯電話ほかの情報端末がダントツと思いますが、当時は、やはり、「本」でした。電車の中は、いろいろと行動が制限されるため、かえって邪魔されずに本に集中するのに良い環境になっています。その頃、とても嬉しい出来事がありました。通学経路上の東京駅すぐそばに、日本最大級の本屋が開業したのです。普通の駅にある大きな書店と同じ面積が（当時、確か）4フロアも積み重なっています。文字に飢えた少年の私は、この本屋にあまり売り上げをもたらさない、立ち読みの常連となりました。

当時のクラスメイトの間にあった雰囲気は「銜学」、つまり小難しいちょっと背伸びした本を読んで評論をぶったり知識をひけらかしたりする空気が流れていました。「タメになる」とか「楽しい」とかの他に「彼奴を凹ます」「バカにされまい」というちょっと不純なワルい動機で本を読んでいました。今となっては恥ずかしくほろ甘苦く当時のことを思い返しますが、身になったかどうかはさておき、知識のがぶ呑みを強いるこの風潮は割に良いものだったと思います。さて、「ちょっと進んだ僕」を演出するには、「文庫」すなわち文芸作品だけを読むのでは心もとなく、「新書」すなわち各種学問の入門的解説を読みこなして武装する必要があります。東京駅途中下車立読ルートには第一経由地として新書コーナーが組み込まれました。

ある日、普段あまり行かない中公新書のコーナーに行くと「発想法」という実にシンプルなタイトルが目に入りました。中学生の私も、さすがに発想という言葉は知っています。何か新しく思い付くことだろ。ところで、その下に「法」とついています。新しいことをどんどん思い付く方法が書いてあればそれは大変だ！勝利のための秘伝の巻き物か？開けて読んで見ると、いわゆる頭のトレーニングの類ではなさそうです。また、文字の書いてある小さい長方形が多数ちりばめら

れて、それがベン図のように囲まれたり、相互に線が引かれたり、と意味ありげな図式が描かれていました。これは、絶対持って帰るべきだ、とこの日ばかりは少し売上に寄与しました。

この本は、有名な発想支援技法の「KJ法」について記したものです。KJは著者の名前に由来します。荒っぽく私なりに説明すると、ある主題について何かまとめたり、新たな知見を得たいという時に次のような手続きを行うというものです。(1)そのことについて調べてわかったこと、または思い付いたことを、一つ一つラベルという小さな長方形の紙に書く。瞬間を逃がさず躊躇なく書き留める。(2)集積されたラベルをかるたのようにひろげて、何となく「近い」もの同士を寄せ集めていく。データをして語らしめよ。先入観で分類してはいけない。(3)前段で寄せ集まったラベルの一山には、それらが寄せ集まった理由というか、それを近いと思った「情念」があるはずである。そこを良く良く考え、一山のラベルの意見を代表するような「表札」を新たなラベルに起こし、それを表紙にして他のラベルを輪ゴムで束ねてしまう。(4)表札たちをはじめのラベルと思い、(2)(3)を再帰的に繰り返す。(5)十分に数が減ったところで、近さや関係を尊重して模造紙に展開していく。表札が配置できたら輪ゴムを一段階ほぐして、中身を配置する。中身の複数のラベルはベン図のように囲み、その集合の標題として表札をつける。また、表札ないしラベル相互の関係を表わす線を引く。(6)これを繰り返していけばすべてのラベルが模造紙の上に露出して、その相互関係が模造紙上のベン図や線で記されている。ラベルを模造紙に糊で固定すれば、それが主題に関して調べたこと考えたことの図式的表現になっている。(7)この図式の全体を漏らさず、文章化する。「情念」によるラベルの結び付きの背景に隠れた論理の糸を一所懸命掘り出す。この過程により、単なる思い付きを超えた「発想」が生まれる。

中学生の頭でも、極めて理にかなっていると思いました。今でもそう思っています。そう思う根拠を書き尽す力がないのですが、ひとつだけ挙げます。何か考えをまとめよう、新しい考えを創ろう、というとき、とにかく書き留めろ、というのは良く言われることです。頭の中だけで考えるよりずっと良いです。ただ、まとまった文章をいきなり頭から書き始めると、あることが障害になります(少

くとも私には)。文章には始まりがあり、終わりがあり、それが1次元的に並んでいます。調べたこと、思いついたことの複雑な相互関係を整理するのにこの1次元構造はとても不便です。また、手近な論理的流れに乗ってくれない、実はそれこそが貴重な素材を無意識のうちに捨ててしまうことを助長します。空間配置や情念→論理の2段構えはこの点だけとっても有利です。

さて、「KJ法」が私の身について、何でも自在に発想できるようになったかは実は疑問です。ただ、いろいろな局面での具体的思考態度や技法には今も影響を受けています。そして、この本に教わった別の重要なポイントは、「物質とは無縁な方法もそれを究めることはすばらしく価値がある」ということでした。この本との出会いを境に、彼の中学生は「ちょっと進んだ僕」を卒業し、「方法論マニア」の一時代を迎えます。

執筆者紹介

武井 由智

電気系准教授。専門領域は、計算量理論とその応用、ランダム変数と独立性、デジタル信号処理。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『発想法』 正・統 川喜田二郎著 中公新書 1967年 1,554円

[ブックガイド目次へ](#)